

# は じ め に

本研究は、文部省科学研究費補助金の助成により、平成8年度、9年度、10年度の3年間にわたって遂行されたものである。

一時保育は、厚生省が平成2年度から一時的保育事業として発足させた制度であり、平成6年度から地域の保育需要に対応する施策として進めている保育所の特別保育事業の1つでもある。児童福祉法の改正にともない利用者の利便性をさらに配慮し、保育サービスの総合的展開を図るために、特別保育事業実施要綱が定められた（平成10年実施）<sup>1)</sup>。保護者の継続的・短時間就労等の就労形態の多様化に伴う一時的な保育や保護者の傷病等による緊急時の保育などの一時保育に保育所が自主的に取り組む場合に、補助を行う事により児童の福祉の増進を図る事を目的としている。

全国私立保育園連盟が、平成4年度に一時保育の事態を把握するために、園長・保育者・保護者を対象に調査結果を行っている<sup>2)</sup>。その結果から園長の約6割のものは、一時保育について「やってよかったと思う」と肯定的に評価していることを明らかにしている。また、一時保育を担当した保育者は、肯定的評価をするものと否定的評価をするものが相半ばしていたという。否定的評価をする根拠として、「慣れたと思うと別の子に対応しなくてはならず大変混乱する」「保育に疲れる」が7～8割を占めていた。このことは、一時保育が実際に保育を担当するものに多くの負担を掛ける形で行われていることを示している。更に、一時保育を利用する保護者の7割を超えるものは、肯定的評価をしており、その理由としては「助かった」とするものが最も多く、約2割のものは「子どもが楽しそうなので驚いた」と語っている。しかし、この制度の利用者は保護者だけではなく、保育を受ける子ども自身も利用者として明確に位置付けるべきであろう。就労や傷病などの為に保護者が、保育に当たることができない時に、その役割を代替する機能をもった場所が制度的に確保されることは、保護者にとってまさに「助かった」というのが本音であろう。しかし、一時保育を利用する一方の主体である子どもが、馴染みのない新奇な場所である保育所に突然入れられることにより、非常に情緒的混乱に陥ることは容易に推察される。子どもが、保護者との突然の分離によって体験する情緒的不安を如何に軽減もしくは解消するか、その方法を検討して適切な方法を開発することは、今後多様化がさらに促進されるであろう保護者の生活を考えた場合、保育を受ける当事者である子どもにとって非常に重要な要件となる。

そこで、本研究では一時保育を利用する子どもが体験する保護者との分離体験から生じる情緒的混乱を補償する方法を探ることを目的としている。

研究協力を依頼する場（ベビー健康プラザ）を提供いただいた上越市役所健康衛生課の方々、研究協力をいただいたお子さんご家族の皆様、市立中央保育園の園長先生と保育者の皆様、資料収集に協力をいただきました鹿目玲子さん、若林陽子さん、田中由美子さん、宮村峰子さん、橘千賀子さん、上越教育大学学生の村田幸子さん、宮川易子さん、林さやかさん、前川瑞代さん、田中菊代さん、石原翠さん、蜂須賀美枝さん、その他多くの関係者のご協力をいただきましたことに厚くお礼を申し上げます。

平成11年3月

研究代表者

大瀧 ミドリ（上越教育大学学校教育学部教授）

研究経費

平成 8 年度	1, 1 0 0 千円
平成 9 年度	8 0 0 千円
平成 1 1 年度	7 0 0 千円

# 目 次

はしがき .....	i
I 研究の目的・計画 .....	1
II 一時的保育事業 .....	3
1 特別保育事業実施要綱の概略	
2 育児における親役割のとらえ方における変化	
3 一時的保育事業における問題点	
4 本研究の対象地域における一時保育の実態	
III 母子分離場面と母子再会場面における子どもの情緒的变化 .....	7
1 サーモトレーサによるデータ分析	
2 実験的研究	
IV 両親の一時保育に対する理解と意識 .....	36
1 目的	
2 方法	
3 一時保育の考え方についての父親と母親の特徴	
4 父親	
5 母親	
V 保育補償 .....	81
おわりに .....	83
文献 .....	84
資料 .....	85

# I 研究の目的・計画

子育て環境の閉鎖性、家庭の孤立化など家庭を取り巻く社会環境の変化の中、子育ての社会的サポートシステムとして新しく導入された一時保育の制度は、親の緊急的な保育要求に対しては大変有効な施策として利用者である親から評価されている<sup>3)</sup>。このことは、本研究の対象地域である地方都市において一時保育を利用した親の人数の伸び率からも確認できる<sup>4)</sup>。この地域の利用者数は、平成8年度は約3,200名であったものが、平成9年度には約4,700名に増加し、その伸び率は約150%となっている。このように親の保育要求にうまく適合した制度ではあるが、利用する子どもの側からみた場合、非常に重大な問題を含んでいる。つまり、子どもにとっては、全く見知らぬ保育の場に突然長時間に渡って放り込まれることで、厳しい精神的緊張を強いられることになりやすい。一時保育を利用する年齢の子どもたちにとっては社会的・情緒的・認知的発達においても、愛着関係を形成することは重要な要件であり、その愛着対象を一時的に失うことが、子どもに非常な精神的混乱を与え、その結果、子どもが脱愛着状態に陥り、子どもの発達が大きく阻害されることが指摘されている<sup>5)</sup>。欧米の子どもに比較して日本の子どもは、見知らぬ場所での約3分間程の親子分離であっても非常に大きな情緒的混乱を示すことが知られている<sup>6)</sup>。もし、1日間の一時保育を利用した場合における親子分離の時間は8時間前後となり、子どもにとって一時保育を経験することによって生じる親との分離体験が非常に厳しいものとなる可能性が推察される。

この制度が、親にとっても子どもにとっても真に有効なものとなるためには、子どもが一時保育を利用することによって受ける可能性のある重度な精神的緊張を緩和する方法を開発することが緊急の課題といえよう。

本研究では、親の緊急的な保育要求を充足することによって生じる、一時的な親からの分離体験が子どもの生活に与える影響を、子どもの年齢との関係から明らかにするとともに、親の養育行動と子どもの新しい環境への適応との関連等について、社会・情緒・認知・生理的側面から分析する。また、分析結果に基づき、親からの一時的な分離体験から子どもが受けるネガティブな影響を補償するための方策について検討する。

そこで、平成8年度には、親の緊急的な保育要求を充足することによって生じる、一時的な親からの分離体験が子どもの生活に与える影響を、分離・再会場面を含む半統制的場面におけるサーモトレーサによる顔面皮膚温度とハートレートなど、生理的レベルの情報を指標として分析する。

平成9年度には、「親の緊急的な保育要求を充足することを目的に制度化された一時的

保育」に対する乳幼児をもつ父親と母親の理解度を調査するとともに、一時的保育を利用した子どもの観察及びこの制度を利用した親と保育者に聞き取り調査を行う。

平成10年度には、一時保育を利用した子どもが、どのような過程を体験しながら保育の場への適応を図るかを明らかにするために、事例的観察と実験的場面における短時間の親との分離を体験した後に、親と再会を果たした子どもが、分離と再会場面でどのような情緒的体験をするかを、行動観察により明らかにする。特に、両場面において子どもが体験する情緒的变化が、子どもの年齢的発達によりどのように変化するかを明らかにするため、事例的かつ縦断的分析を行う。

3年間にわたる結果に基づき、親からの一時的な分離体験から子どもが受けるネガティブな影響を補償するための方策について検討する。

## Ⅱ 一時保育について

一時保育は、厚生省が平成2年度から一時的保育事業として発足させた制度であり、平成6年度から地域の保育需要に対応する施策として進めている保育所の特別保育事業の1つでもある（平成6年12月）。児童福祉法の改正にともない利用者の利便性をさらに配慮し、た保育サービスの総合的展開を図るために、特別保育事業実施要綱が定められた（平成10年実施）。一時保育は、延長保育等促進基盤整備事業として位置付けられている。保護者の継続的・短時間就労等の就労形態の多様化に伴う一時的な保育や保護者の傷病等による緊急時の保育などの一時保育に保育所が自主的に取り組む場合に、補助を行う事により児童の福祉の増進を図る事を目的としている。ここでは、官製のお仕着せの保育ではなく、保育所の創意工夫や利用者の利便を考慮した規制の緩和や手続きの簡素化などに取り組むと共に、利用者の利用に支障をきたさない範囲でできるだけ早急の実施要綱に基づき事業の仕組みを見直すことが明記されている。

この実施要綱の内容は、平成2年6月15日付の児童家庭局母子福祉課長通知<sup>7)</sup>である「一時的保育事業の実施について」とほとんど同じ内容となっている。

### 1 特別保育事業実施要綱の概略

#### (1) 一時保育の対象児童等

- 1) 保護者の就労形態等により、家庭における育児が継続的に困難となり、一時的に保育が必要となる児童（保護者の短時間・断続的労働、職業訓練、就学等により、原則として平均週3日程度家庭における育児が困難となり、保育が必要となる児童）
- 2) 保護者の傷病・入院等により、緊急・一時的に保育が必要となる児童（保護者の災害・事故、出産、看病・介護、冠婚葬祭等社会的にやむを得ない事由により緊急・一時的に家庭における育児が困難となり、保育が必要となる児童）
- 3) 私的な理由やその他の事由により一時的に保育が必要となる児童（保護者の育児等に伴う心理的・肉体的負担を解消する等の私的理由により、一時的に保育が必要となる児童また、障害児や児童数の減少した地域の児童を体験的に入所させ、集団保育をするため等により保育を必要とする児童）
- 4) 児童数1日当たりの平均対象数は、6人以上とする。

## (2) 事業の実施

- 1) 保母を配置する。
- 2) 専用の部屋を確保し、実施することを原則とする。
- 3) 対象児童の受け入れは、保育需要に応じて弾力的に対応する。
- 4) 保育は、保育所保育指針を参考に実施する。
- 5) 児童の健康状態の把握に務める。
- 6) 一時保育実施について地域住民への周知を図る。

## (3) 実施手続き

- 1) 市町村は、保育所の積極的な取り組みを妨げることが無いように、積極的に対応すること。
- 2) 市町村長及び特別区の長は、都道府県知事と十分協議する。
- 3) 市町村は、必要経費の全部または一部を補助し、保育料を徴収する場合は、あらかじめ保護者負担額を設定する。
- 4) 市町村が、実施する事業に国も補助する（定額の3分の1相当）。

緊急保育対策等5か年事業による目標値（平成11年度）は、3,000 か所となっている。しかし、厚生省児童家庭局の調べでは、平成9年度の目標値800 か所に対し、実施状況は650 か所（公営130 か所=20 %、民営520 か所=80 %）となっており、実施率は65%にすぎない<sup>8)</sup>。全国私立保育園連盟が、平成4年度に行った調査では一時的保育事業実施園は、公立32.5%、私立67.5%であり、公立と私立の比率はむしろ拡大する傾向を示している<sup>9)</sup>。

## 2 育児における親役割のとらえ方における変化

平成10年度の厚生白書<sup>10)</sup>では、「専業主婦であっても、一定の時間、保育所の一時保育やベビーシッターを利用するなどして気分転換を図ったり、自分の時間を持ち、適当にストレスを発散することで、より豊かな心で子どもと接することができれば、四六時中子どもの側にいなくともそれは立派な親としての責任の果たし方であり、愛情表現でもある。」と明記されている。これは「母性神話」「三歳児神話」など子育ての責任を母親に集中させて考えられてきた考え方を大きくシフトさせるものとなっている。背景には、男女平等及び少子化傾向など世界的な潮流と日本の特殊な社会的状況が大きく関与している。

## 3 一時的保育事業における問題点

全国私立保育園連盟の調査結果に基づき、つぎの問題点が指摘されている<sup>11)</sup>。

- (1) 行政側の積極的な取り組みが不可欠
- (2) 姿勢は積極的だが、保育の在り方に工夫・改善の余地のある私立園

- (3) 新規保育事業への積極的姿勢が求められる公立園
- (4) 求められる家庭と園との対応の連続性
  - ①家庭で子どもがなじんだ物を園に持ってゆくことに、園も親も無関心
  - ②求められる的確な情報の交換
- (5) 柔軟な対応を必要とする一時的保育事業
  - ①保育時間について
  - ②担当する保育者について
  - ③保育の方法・形態について
- (6) 一時保育は高い資質を備えた保母を求める
- (7) 一時的保育事業実施要綱の改善
  - ①子どもの年齢、利用人員に見合った保母の配置
  - ②0歳児の扱いを明確にする
  - ③専用の保育室に最低整える設備、備品の明記
  - ④承認期間を延ばす
  - ⑤少なくとも保母2人の配置と委託費を措置費と同じ扱いにする
  - ⑥保育時間の明記
  - ⑦子どもの安全に関する事項（健康診断の実施、保険加入費用の補填、怪我などの医療費補助）とその財政的保障の明記
  - ⑧担当職員の採用条件の明記
  - ⑨子どもの年齢に見合った職員配置基準の明記
- (8) 多様化に応える保育所の管理費の増額
- (9) 一時的保育事業の指定園方式には無理がある

#### 4 本研究の対象地域における一時保育の実態

本研究の対象地域は、人口約13万の地方都市であり、一時保育の実施園は公立3園（内1園は障害児通園施設）と私立4園で行われている<sup>12)</sup>。平成9年度の利用者は、約4,700名（公立で約2,600名、私立で約2,100名）であり、利用児の約85%は3歳未満児となっている。利用形態は、「定期的なパートや自営業の繁忙期など断続的に家庭で保育が困難な保護者が利用」する非定型的保育（週3日を限度に一定期間利用可）の利用者が約71%、保護者が就労・病気・家族の看護・出産・冠婚葬祭などにより短期的に家庭で保育が困難な場合に利用する緊急一時保育の利用者が約29%となっている。利用できる子どもの年齢は生後7ヶ月以上で、一時的に市内に居住している乳幼児であれば利用することができる。保育時間は平日8:30～16:00、土曜日8:30～11:30 延長保育も可能であり、保護者の費用負担は3歳未満児1日1,500円、3歳以上児1日1,100円である。利用申し込みは、前日までに保育園、児童福祉課にある「申請書」により市長宛に提出する。その際、家庭状況、子どもの身心の状態、授乳及び離乳食の状態など、保護者と面談しながら保護



者が「調査票」に記載する。ただし、緊急時は電話申し込みや直接来園することも認められている。保育は、専用保育室で、専任保母によって行われ、保母の人数は利用する子ども数により増員される。

### Ⅲ 母子分離場面と母子再会場面における 子どもの情緒的变化

#### 1 サーモトレサーによるデータ分析

##### (1) 目 的

本研究は、親の緊急的な保育要求を充足することによって生じる、一時的な親からの分離体験が子どもの生活に与える影響を、分離・再会場面を含む半統制的場面におけるサーモトレサーによる顔面皮膚温度とハートレートなど、生理的レベルの情報を指標として、分析するものである。

##### (2) 方 法

- 1) 研究対象：生後4か月児～10か月児の計29名の乳児（男児17名、女児12名）とその母親である。研究の協力は、研究対象地域の市が12か月未満児とその保護者を対象に毎月1回、定期的に行っている「子ども健康プラザ」に参加した母親に依頼した。

研究協力を得た対象児の多くのものが、他家を訪問する機会は週2～3回程度であり、生活の中心は彼等の家庭内におかれているものであった。

- 2) 研究方法：実験室の状況は、図Ⅲ-1に示す通りである。

##### 3) 使用機器等

顔面皮膚温度の計測にはサーモトレートを使用した。使用機器は、日本電気三栄TH3100を使用し、解析ソフトとしてTH31-723を使用した。一秒間隔で画面に写し出されている対象物の表面温度を計測し、最高1000フレームの熱画像データをキャプチャし、保存することが可能であった。サーモトレートは、子どもが着席しているラックから1mの位置に設置し、子どもの顔面を正面からとらえられるように設置した。子どもの表情や実験室の状況を記録するためにVTRカメラ3台を使用した。2台のカメラは、子どもから見て前方コーナーの上部に設置し、1台は子どもの表情をとらえ、他の1台は子どもと母親及びストレンジャーの様子をとらえるように機能を分化させた。残りの1台は、後方左コーナー上部に設置し、実験室全体の様子を記録するために設置した。カメラは、すべてコントローラーで管理された。3台のビデオカメラの映像とサーモト

レート映像を4分割デッキに取り込み映像の同期化を図った。4分割デッキに取り込んだ映像をビデオデッキに録画した。顔面皮膚温度データは、実験後パソコンに取り込みファイルに保存した。

なお、顔面皮膚温度の測定位置を固定するため、対象児の眉間上方部の額部分に電極を貼った。電極の大きさは、4.3cm × 3.4cm である。電極の中央に2.3cm × 1.5cm の窓を開け、枠の表面をアルミ箔で覆った。対象児は、テーブル付きのラックに着席し、対象児から約1mの離れた所にサーモレーサを設置した。

心拍の計測にハートレートを使用した。使用機器は、竹井機器T. K. K. 1850aである。

また、子どもが着席したラックテーブルの上にガラガラなど、数種の玩具をおいた。

実験状況は、図Ⅲ-1に示す通りである。

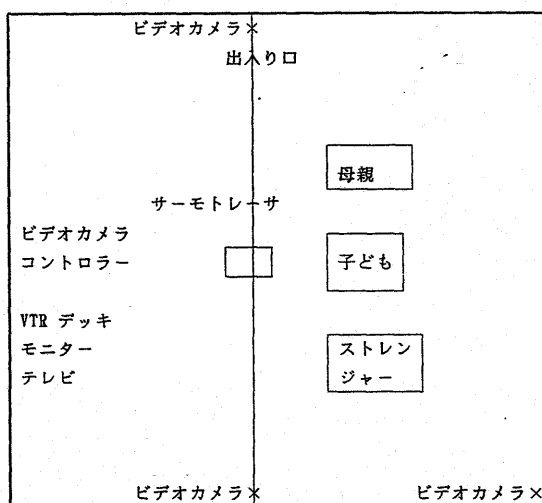


図 Ⅲ - 1 サーマレーサ計測時の状況

#### 4) 実験手続き等

使用したサーモレーサの計測能力の関係からデータ収集に要する最長実験時間は1,000 秒、つまり、16.7秒間以内に実験が終了するように手続きを設定する必要があった。そこで、母子同室場面・母子分離場面・母子再会場面をそれぞれ5分に設定することとした。子どもが泣きなどの、強い情緒的混乱を呈す場合は当該場面の継続時間を短縮もしくは延長することにした。

表Ⅲ-1に手続きを略記した。

表Ⅲ-1 実験1及び実験2の概略

母子は、別室で実験に関する説明を受けたあと、実験室に案内された。子どもはハートレートを着装後、ラックに着席した後、眉間上方の額部分に電極を貼られた。

母子分離と母子再会場面の手続きとして次の2通りの手続きを使用した。これらの手続きのいずれを割当てるかについては、同じ月齢児内でランダムに割当た。

手続き1

母子同室場面 約5分間

母親と子どもを実験室に案内し、子どものハートレートを着装する。

子どもが機嫌よく遊んでいれば、いつものように相手をしながらアンケートにも回答する。

子どもが働きかけてきた時には、いつものように相手をする。

子どもの機嫌が悪い時には、子どもの気持ちを鎮めるように働きかける。

母子分離場面 約5分

ストレンジャーが入室し、母親は退室する。

子どもが機嫌よく遊んでいれば、適当に相手をする。

子どもが働きかけてきた時には、あまり刺激し過ぎないように相手をする。

子どもの機嫌が悪い時には、子どもの気持ちを鎮めるように働きかける。

母子再会場面 約5分

子どもが機嫌よく遊んでいれば、いつものように相手をしながらアンケートにも回答する。

子どもが働きかけてきた時には、いつものように相手をする。

子どもの機嫌が悪い時には、子どもの気持ちを鎮めるように働きかける。

手続き2

母子・ストレンジャー同室場面 約5分

母子とストレンジャーが一緒に入室する。ストレンジャーは、母親と話しながら子どもに働きかける。

子どもが母親やストレンジャーに働きかけてきた時には、あまり刺激し過ぎないように相手をする。

子どもの機嫌が悪い時には、子どもの気持ちを鎮めるように働きかける。

母子分離場面 約5分

母親は退室し、ストレンジャーが子どもと一緒に残る。

子どもが機嫌よく遊んでいれば、適当に相手をする。

子どもが働きかけてきた時には、あまり刺激し過ぎないように相手をする。

子どもの機嫌が悪い時には、子どもの気持ちを鎮めるように働きかける。

母子再会場面 約5分

子どもが機嫌よく遊んでいれば、いつものように相手をしながらアンケートにも回答する。

子どもが働きかけてきた時には、いつものように相手をする。

子どもの機嫌が悪い時には、子どもの気持ちを鎮めるように働きかける。

## 5) 母親への聞き取り調査等の内容

同居家族の構成員

母親が外出する時子どもの世話をする人

子ども連れで買い物に行く機会(1週間に)

子ども連れで他家を訪問する機会(1週間に)

子どもが他児と遊ぶ機会(1週間に)

家庭に家族以外の人訪問する機会(1か月に)

父親が子どもに関わる機会(1週間に)

子どもと一緒に食事をする人

子どもがお話(絵本)など聞く機会(1週間に)

子どもが所有している玩具の種類

子どもが好きな一人遊びの種類

子どもが相手をしてもらうのが好きな遊びの種類

子どもの相手ができない時の対処

人見知りの程度

子どもの気分のちなおり

用心深さ

初めての所でいつもの元気が出るまでの時間

## (3) 結 果

### 1) 対象児の属性及び生活環境

対象児の同居家族数は、平均4.0人( $SD=1.32$ )であり、3人から6人の間に分布していた。対象児の生活空間における変化の程度をみると、買い物に連れてゆかれる回数は週平均3.7回(レンジ 1-7,  $SD=2.05$ )、他家を訪問する回数は週平均2.2回(レンジ0-7,  $SD=1.64$ )、他児と遊ぶ回数は週平均2.1回(レンジ 0-7,  $SD=1.64$ )、お客の来訪は月平均9.2回(レンジ 1-61,  $SD=12.75$ )であった。対象児が持っている玩具の種類は平均3.50(レンジ 1-9,  $SD=2.43$ )、絵本を読んでもらう回数は週平均2.2回(レンジ0-7,  $SD=2.54$ )であった。また、気分の立ち直りに要する時間の平均は12.3分(レンジ 2-40,  $SD=10.67$ )、初めての場所でいつもの元気が出るまでに必要な時間の平均は22.5分(レンジ 2-120,  $SD=27.84$ )であった。

母親が出掛ける時に面倒をみる人が決まっているものは62.5%(15名)、決まっていないものは37.5%(9名)ある。決まっている場合の45.8%は祖父母であり、父親は16.7%であった。また、父親の育児行為が決まっている家庭は66.7%であった。好きな遊びがあるものは87.5%(21名)、絵本を読んでもらうものは62.5%(15名)、すべての対象児は遊んでも

らうのが好きな遊びを持っており、特に身体的な動的遊びは45.8%(11名)、運動具を使う遊びは12.5%(3名)、静的な遊び33.3%(8名)などを好んでいた。現在人見知りが見られるものは87.5%(21名)おり、その程度が非常に強いものが4.2%(1名)、かなり強いものが25.0%(6名)、それ程強くないものが54.2%(13名)であった。また、新しい環境への適応に際して用心深い傾向があるものが45.8%(11名)、その傾向があまり顕著でないものが50.0%(12名)であった。

## 2) 顔面皮膚温度

対象児の顔面皮膚温度を子どもの正面からとらえるようにカメラを設置したが、子どもの顔面はいつもカメラに向いおらず、子どもの顔が向けられる範囲はかなり大きいものであった。使用した機器では子どもの顔面を正面からとらえられない場合には、子どもの額部分の枠内の温度を正確に計測することができなかった。そこで、サーモトレーサに記録された子どもの顔面が真っ正面からとらえられたものだけを分析対象とした。

分析対象とした顔面皮膚温度の情報は、各対象児の名前を付けてパソコンに保存した。ついで、VTRに録画された映像を視聴し、実験手続きの各場面の開始時間と終了時間を確認した。各場面の開始時間と終了時間によって、各場面に対応する顔面皮膚温度のファイルナンバーの範囲を特定した。個々のファイルについて対象児の顔面に貼られた電極の内枠の最高温度を抽出した。これは、顔面に電極を貼ることによる影響(電極周辺の温度が下がるとともに、時間的に変化する)を避けるための配慮であった。

手続き1と2における各場面間(母子同室場面・母子分離場面・母子再会場面)の変化の様相について検討した。いずれの手続きにおいても場面間に有意な差は見出されなかった。この結果から手続き1と2の結果を一括して扱うこととした。

まず、母子同室・母子分離・母子再会が、子どもの顔面皮膚温度に与える影響について検討する。対象児の状態によって場面を中止したものもあるため、各場面の分析対象数は異なる。各場面の経過時間に伴う顔面皮膚温度の変化を見るために、1分間隔で平均温度を算出した。男児及び女児について顔面皮膚温度の変化を図Ⅲ-2と3に示した。

母子同室場面における温度変化の幅が1番大きい対象児は、no.11の0.87であり、最小幅の対象児はno.17と18の0.13であった。母子分離場面ではno.16が最大幅を示し、その値は0.61であり、最小幅はno.3とno.10の0.11であった。しかし、最小幅を示したno.3とno.10はいずれも場面を途中で中止したものである。中止しなかった対象児の中ではno.5と19の値である0.12が最小幅であった。母子再会場面で最大幅を示したのはno.2の0.89であり、最小幅を示したのはno.21の0.03であった。この場面をすべて行ったものでは、no.3の0.04が最小値を示した。

母子同室場面・母子分離場面・母子再会場面における温度幅を見ると、最大幅はno.2の2.7であり、最小幅はno.24の0.22であった。

顔面皮膚温度の変動には、いろいろな要因が関与している。そこで、子どもの活動状態、

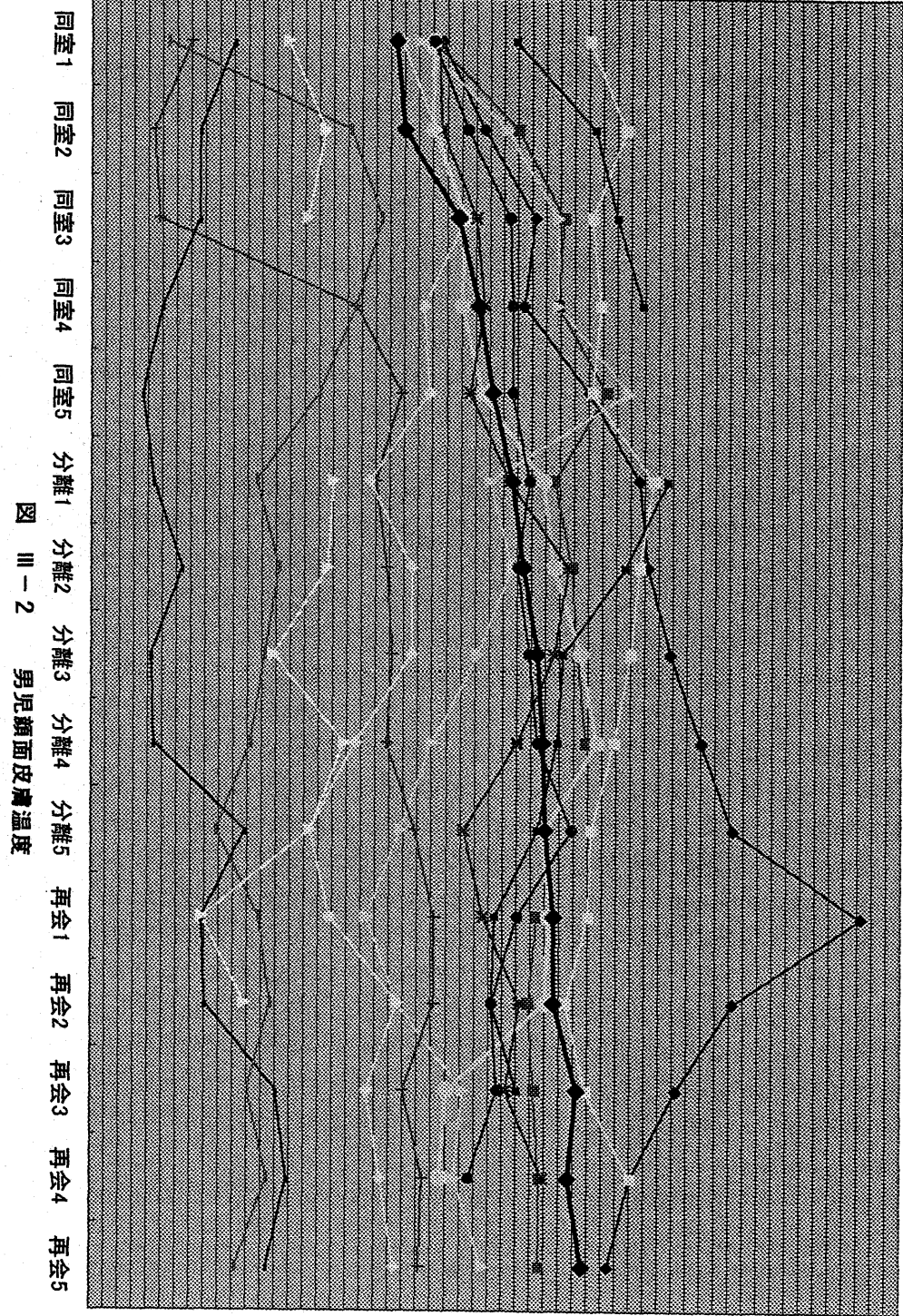
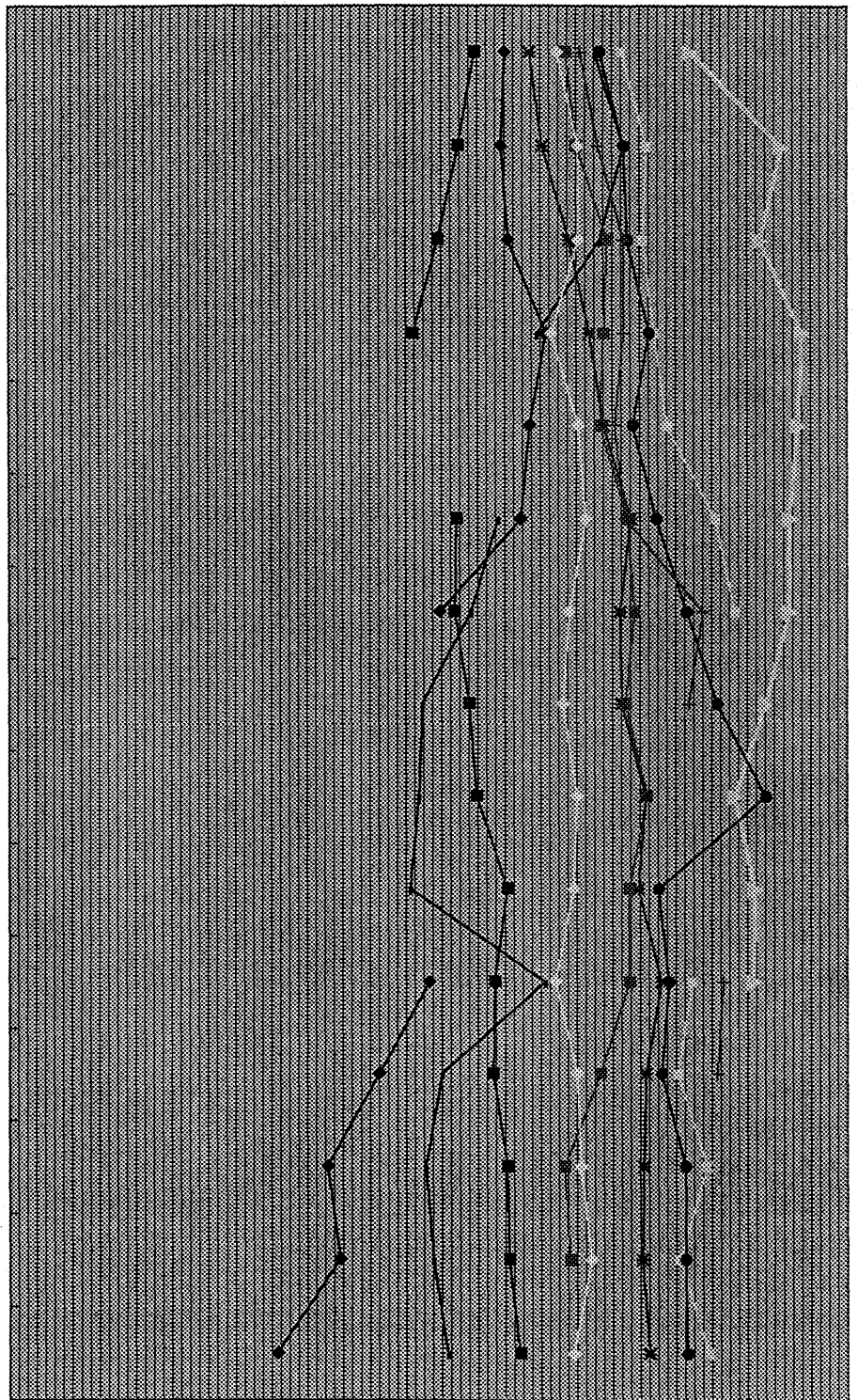


図 III-2 男児顔面皮膚温度

同室1 同室2 同室3 同室4 同室5 分離1 分離2 分離3 分離4 分離5 再会1 再会2 再会3 再会4 再会5

図 III-3 女兒顔面皮膚温度





情緒の状態との関連について検討した。活動状態については、玩具等に関わる際の大筋肉の関与状況により5段階評定を行った。また、情緒の状態については、泣き、笑い・発声、好奇心等の強度について5段階評定を行った。

事例的に顔面皮膚温度の変動とこれらの評定との関連について見る。

#### NO. 21

この事例は、生後6か月27日の男児であり、母親と初めて会った女性に対する態度に顕著な差異が認められたものである。つまり、母子同室場面では、ラックのテーブルにおかれた玩具を手にして口に入れる、手にした玩具でテーブルをたたくなどの行動が認められた。しかし、笑いや発声などの快の情緒と関連する行動や玩具以外のものに関心を向ける行動は全く認められなかった。母子分離場面では、対象児は手にした玩具を口に入れながらストレンジャーである女性の顔を見つめては、嬉しそうに何度も高笑いを繰り返し、子どものテンションが非常に高いことを伺わせる行動が場面全体で認められた。次の母親と再会する場面では一転して高笑いは消え、対象児は玩具を口に入れながら母親が提示する玩具に注意を向ける行動が認められた。行動的には母子同室場面と類似した行動を呈していた。高笑いが全く認められなかったため母親は「お母さんには、笑ってくれないの？」と話しかけるが母親への笑い掛けや高笑いは認められなかった。各場面での対象児の行動と顔面皮膚温度の変化と対応づけると、母子分離場面の開始1分で最高温度を呈し、時間経過に伴って徐々に温度が下降を示している。また、母子同室場面の顔面皮膚温度に比較して再会場面で低温を示し、母親が対象児の高笑いを期待して玩具を提示するなどの働きかけが対象児のテンションを上げるために、必ずしも効果的ではなかったことが図から伺える。特に、母子同室場面に比較して母子再会場面の温度が低いことから、対象児が「笑い」を表出する情緒状態にはなかったことが推察される。顔面皮膚温度の変化は、子どもの内的状態を質的情報から量的情報に変換する手段としての有効性が伺える。

#### NO. 16

この事例は、生後8か月5日の女児であり、初めて会った女性に対する態度に顕著な差異が認められたものである。つまり、母子同室場面及び母子再会場面では泣きが認められなかったが、母子分離場面の前半と後半で明確に異なる情緒状態にあった事例である。本対象児は、母子分離場面の前半には泣きが認められなかったが、後半のすべてに泣きが認められた事例である

母子同室場面では、手にした玩具でラックのテーブルを叩く、両手にもった玩具を振りかざしたり、母親の提示する玩具に注目するなど、かなり高い活動性を示した。また、発声など対象児が快状態にあることを示唆する行動が認められた。母子分離場面ではラックにおかれている玩具にゆっくり手を出したり、時々ストレンジャーである女性の方に目を向けるなどの行動が認められた。後半、対象児はかなり強い泣きを示した。母子再会場面で母親に抱っこされ泣きやみ、母親が提示する玩具を注視する。対象児の気持ちが落ち着

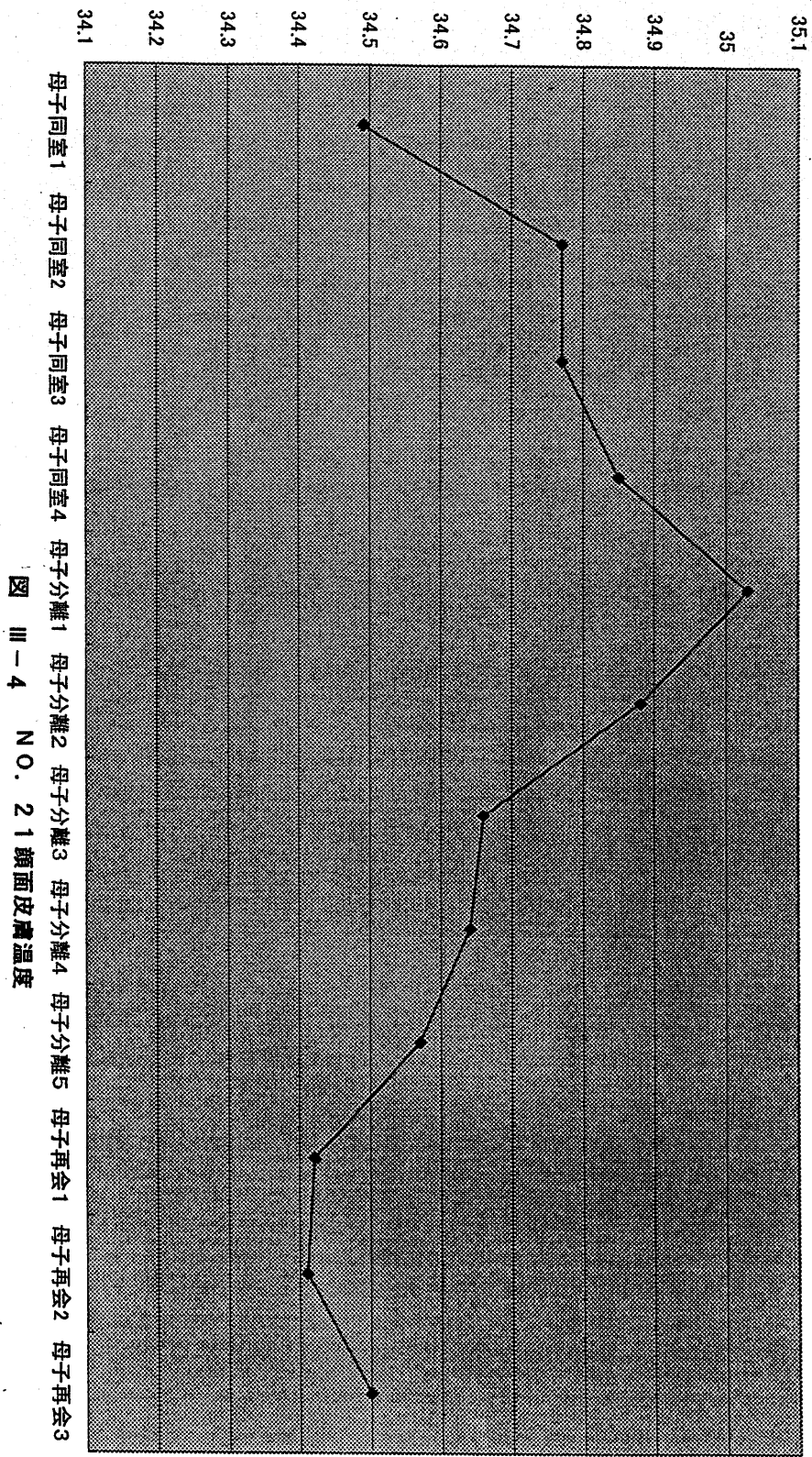


図 III-4 NO. 21 顔面皮膚温度

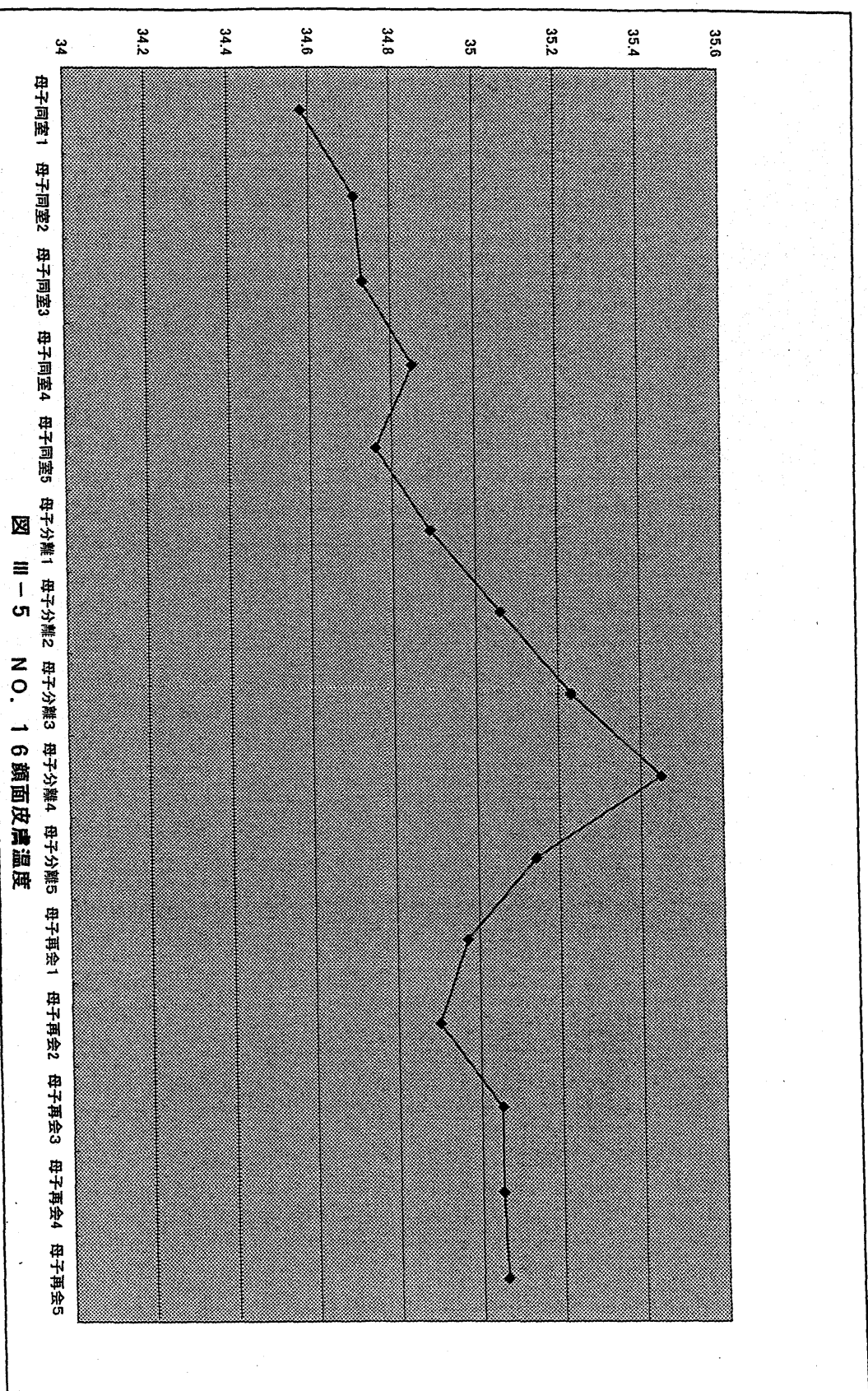


図 III-5 NO. 1 6 顔面皮膚温度

いてから児をラックに戻すと玩具を手にして遊びだす。しかし、母親がちょっと移動すると泣きを示すなど、十分に気持ちが立ち直っていないことを示唆する行動が認められた。

このような対象児の行動と顔面皮膚温度とを対応づけると、母子分離場面の開始時から徐々に温度が上昇し、泣きが認められた母子分離場面で最高温度を示し、母親との再会によって下降を示すものの、母子同室場面に比較して高温を示している。この事例の顔面皮膚温度の変化は、子どもの情緒状態に対応した変化を顕著に示している。

#### NO. 20

この事例は、生後8か月29日の女児であり、母子同室場面では活動性はそれ程高い事例ではないが、発声などが比較的多く表出されており、情緒的快状況にあったものである。しかし、母子分離場面で発生した泣きは時々なだまることもあったが、泣きが繰り返されたため、この場面の時間を短縮した。そして、母子再会場面で母親が入室し、対象児を抱っこすることで多少泣きやみが認められたが、すぐにまた泣きだすというように、泣きが続いたため、この場面の時間も短縮したものである。

対象児の状況と顔面皮膚温度の変化を対応づけると、母子分離場面で顔面皮膚温度は急激な上昇を示し、母子再会場面で更に上昇を示している。対象児の情緒的混乱の状態を明確に示している。

#### NO. 17

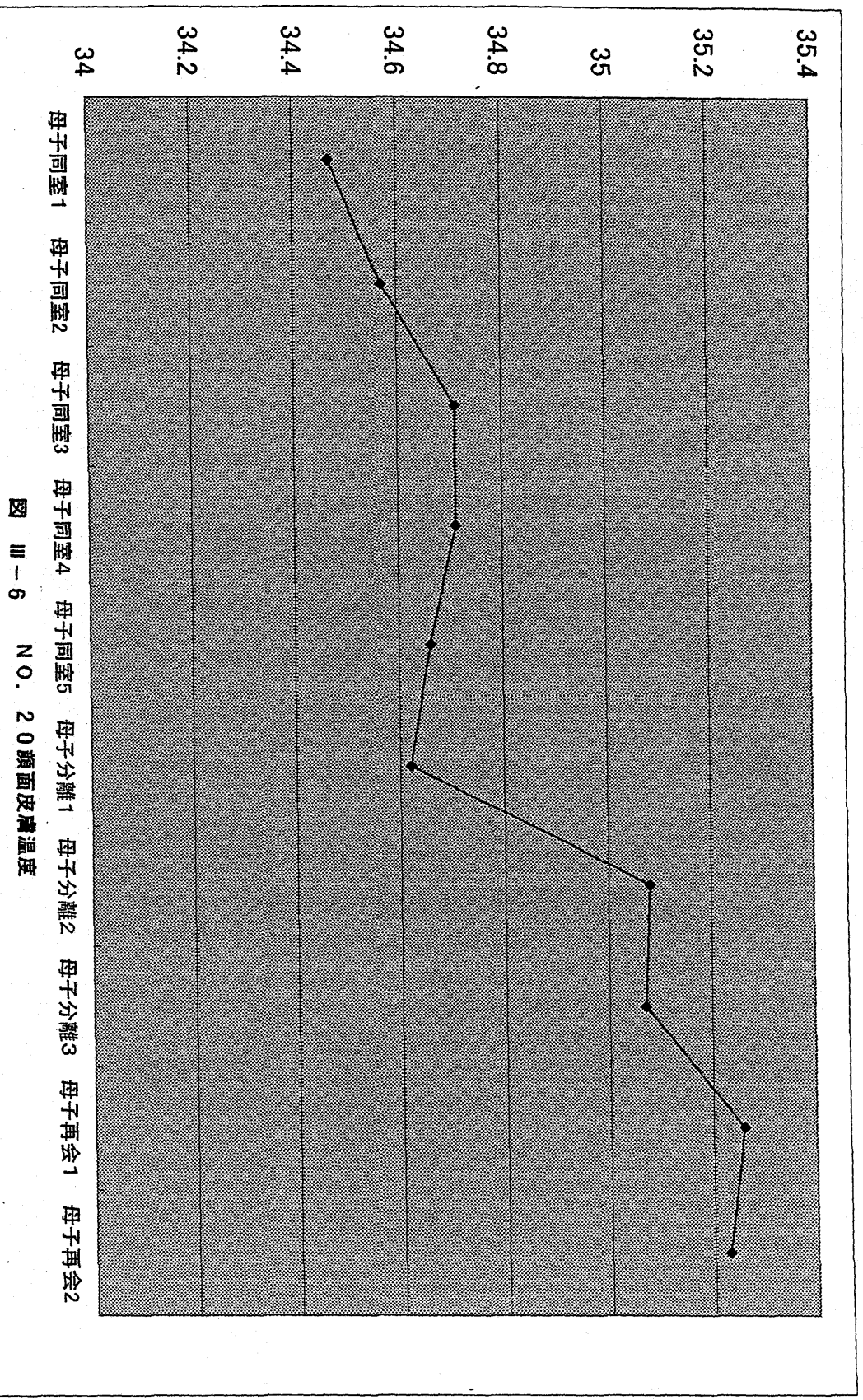
この事例は、生後8か月4日の男児である。この対象児は、母子同室場面を比較的穏やかに過ごし、母子分離場面の前半に泣きが認められたが、後半には泣きが消失し、母子再会場面の後半にぐずりが再び認められた事例である。

母子同室場面ではラックに馴染めず、1分経過後ぐずりが認められたため母親が膝に抱っこする。それ以降は、泣きが消失し、発声がしばしば認められた。母子分離場面で母親に替わり、ストレンジャー役の女性が抱っこする。ストレンジャーの顔を見上げ泣き出したため、ラックに対象児に戻すと泣きやみ、ストレンジャーが提示した玩具を口にに入れる。母子再会場面では、母親に抱っこを要求し、母親に抱っこされながらご機嫌な発声が認められたが、場面の終了近くでぐずりが認められた。

対象児の状況と顔面皮膚温度の変化を対応づけると、母子同室のぐずりは2分目の温度上昇と対応している。また、母子分離1から3の高温は泣きに対応し、母子分離4、5の下降は対象児のなだまりと対応している。さらに、母子再会2の下降は、母親に抱っこしてご機嫌の状況に対応し、母子再会4の上昇はぐずりと対応している。

以上事例に示したように、各場面における子どもの情緒的状況は顔面皮膚温度の変化と明確な対応関係をもつことが明らかになる。しかし、その対応関係は、Mizukamiら<sup>13)</sup>の結果とは異なっている。Mizukamiらは、見知らぬ場所で独りにされたり、あるいは母親が





母子同室1   母子同室2   母子同室3   母子同室4   母子同室5   母子分離1   母子分離2   母子分離3   母子再会1   母子再会2  
 図 III-6   NO. 20 顔面皮膚温度

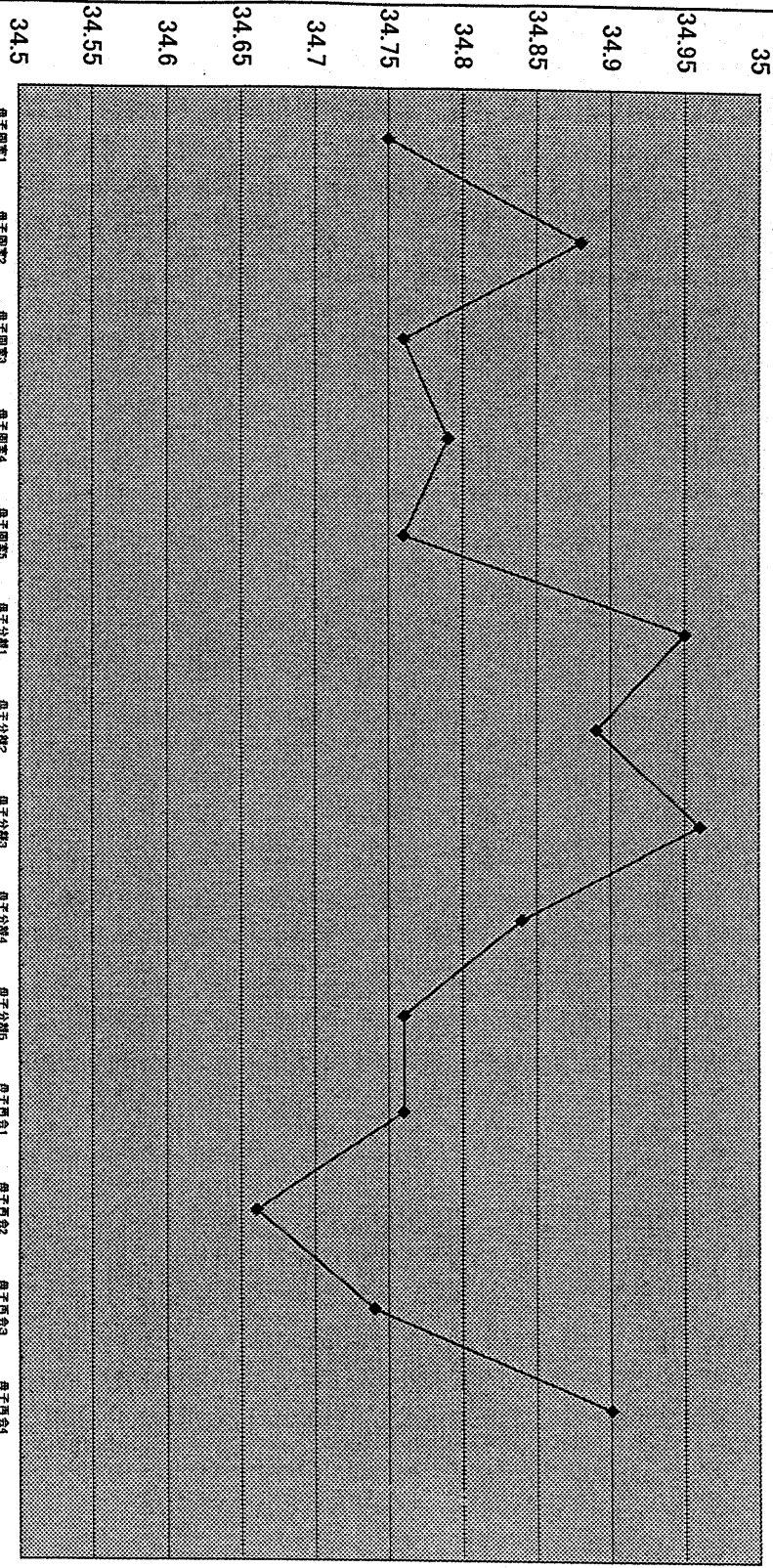


図 III-7 NO. 17 額面皮膚温度

いない所でストレンジャーにあやされるという状況では、生後16週に満たない乳児でも多くの乳児に顔面の皮膚温低下が認められることを明らかにし、顔面皮膚温の低下がストレスの指標となり得ることを明らかにしている。本研究の対象児は、Mizukamiらの対象児より月齢が高く、自分の情緒状態を大人たちにより明確に伝える表現能力を持った子どもたちである。そのため、快の情緒は発声やほほ笑みにより、また不快の情緒はぐずりや泣きによつて的確に表現することができる。そのため、不快の情緒の表現である泣きは、顔面の筋肉運動を活発化させ、その結果として顔面皮膚温度の上昇を来すものと考えられる。月齢の大きい子どもの場合には、顔面皮膚温度の変化と情緒の状況が対応しており、顔面皮膚温度によつて、子どもの情緒の状態を量的にとらえることの可能性が示唆された。この点についてはさらに詳細な分析を重ねる必要がある。

## 2 実験場面におけるデータ解析

### 目 的

ここでは「一時保育を利用している子どもの事例的観察」と、「実験的な母子分離状況における子どもの行動分析と共に、子どもの年齢的発達の検討」を行うことにより、子どもが一時的に親との分離を経験することによる情緒的混乱を軽減する方策について検討する。

全国私立保育園連盟の保育総合研究委員会第一部会が行った一時的保育事業実施状況調査報告書によれば<sup>14)</sup>、保育園側が子どもの保育の場への適応を図るための配慮の実態に関して、次のように報告されている。

「一対一でおんぶなどして子どもの要求を受け入れる」「子どもの気分を変えるために外に連れ出す」など、ほとんどの保育者が配慮している。つまり、子どもが安定するまでは、個別的に関わり、身体的接触や気分を変える工夫をすることで、子どもの気持ちの安定が得られるような配慮がなされている。しかし、給食時に好きなものを食べさせたり、家からお気に入りのおもちゃを持ってくる、などの配慮はあまりなされていない。つまり、家庭と保育園の生活上の連続性を考慮した対応の必要性についてはほとんど考えられていないことを明らかにしている。

この点に関しては、保護者も「自分の子どもに対する個別的配慮を求める」ものは多いが、「お気に入りのおもちゃ、タオルなどを（保育園へ）持って来る」ことを望むものは少ないことを指摘している。つまり、保育者も保護者も家庭と保育園の連続性を図ることで子どもの分離不安を和らげようとすることは配慮の対象とされていない。これは、保育者も保護者も保育園と家庭は異なる場であるという考え方に立っていることを示している。しかし、保育園の中に家庭を持ち込むことを避けようとするのが果たして子どもにとってよいことであるのかどうかについて、改めて考えている必要があるだろうとの問題指摘がなされている。

また、個別的な関わりについては、「保育者とのスキンシップ」「一対一の対応」「不安感を取り除くために乳児室で過ごす」「家庭の生活リズムに合わせる」などが具体的に取られていた。「家庭の生活リズムに合わせる」ためには「寝る時の癖（うつぶせ寝、タオルなどを抱いて寝る、おんぶで寝るなど）」「排尿の仕方、知らせ方」「食事の状態」「子どもの愛称」「好きな遊び」「興味のあること」などが事前情報として保育園側の収集対象とされている。保育園側の保育環境上の配慮としては、「家庭的な雰囲気大切に」「おもちゃ、絵本やテレビを子どもの手の届く位置に配置し、子どもが好きな時に好きなもので遊べるようにする」と共に、「危険のないように十分に注意しながらできるだけ自由に」を保育環境整備の基本としている。

保育者は、子どもが保育の場に慣れたことを次のような子どもの具体的な行動を指標として判断しているとのことであった。



「泣かなくなること」「笑顔が見られること」「表情が和らぐこと」「食事が食べられること」「食欲がでること」「午睡が安定すること」「トイレで排泄できること」「友達と遊ぶこと」「保育者と安心して一緒に入れること」「興味を示すこと」「いたずら、けんかができること」「自己主張ができること」

子どもは、これらの行動を一様に可能とするのではなく、まず「笑顔が見られる」、ついで「食事が食べられ」、さらに「午睡ができる」というように、段階的に可能になる行動を拡大していくことが指摘されている。

先にも指摘したように、一時保育を利用する子どもへの保育園側の配慮は、かなりきめ細かになされているが、基本的には「保育園」と「家庭」は別物という考えが明確に存在しており、日常的に保育園を利用する子どもたちにとっては、「保育園」と「家庭」を別空間として分離することが生活リズムの確立などからも望ましいことと考えられている。しかし、一時保育、特に、緊急的にまさに「一時的」に保育園を利用する子どもにとっては、むしろ「保育園」と「家庭」が生活空間として関連性があることが、「保育園」の「新奇性」を少なくすることになり、そのことが新しい場に対する子どもの緊張感を軽減し、子どもの情緒的負担を軽減することにもなることの認識が必要となろう。この点について実際に一時保育を利用している子どもの行動を事例的に観察し検討する。

さらに、実験的場面において短時間の親との分離を体験した後に、親と再会を果たした子どもの行動を詳細に分析することにより、親との分離体験が子どもに与える影響を明らかにすると共に1歳から3歳まで同じ対象児を追跡研究することにより、親との分離体験が子どもに与える影響における年齢的な変化を明らかにする。

これらの結果から親からの一時的な分離体験によって子どもが受けるネガティブな影響を補償するための方策について検討する。

## 1. 一時保育を利用している子どもに関する事例

### (1) 観察保育園の状況

#### 事前情報

一時保育を利用する場合、次の情報を保育園側に提供することが求められている。

対象児について：幼児の氏名、生年月日、性別、呼び名、仲良しの友達の名前、

対象児の健康等について：既往症、出生歴、掛かり付けの病院

対象児の生活について：食事（偏食・使用するもの・食事の量等）、排泄、着脱、睡眠（午睡・寝付き等）、清潔（洗顔・歯磨・手洗い・鼻かみ）、言葉、習癖（指しゃぶり・左きき・どもり・つまみ等）、性格（強情・気が弱い・根気がない・泣虫・明朗・やさしい・人見知り等）

授乳及び離乳食の状態：ミルク（メーカー・回数・量）、離乳食（開始月齢・回数

食べている食品、調理形態（スープ状・飲み込める固さ・舌でつぶせる固さ・歯茎でつぶせる固さ）、食べさせられないもの

保護者等について：保護者の氏名・住所・連絡先、同居家族氏名・生年月日・職業・勤務先（学校）、住居環境、健康保険証番号等、送り迎え者の氏名

**保育者** 約10年の保育経験のある専任の保育者1名。園長は、この専任保育者について、ベテラン保育者であり、穏やかな性格で、子どもとの関係をつけるのが非常に旨いと評価している。利用する子どもの人数により専任の保育補助者が入る。昼食時には補助者が入る（保母または園長）。通常保育に携わっている保育者も一時保育の子どもたちに対して保育的配慮の対象としている。

**利用上の配慮** 専用の保育室が用意されている。子どもたちは、他の保育空間も自由に使うことが認められている。

対象児が日常使用している布団を午睡用に持ってくる。着替え等対象児の持ち物を入れる棚は、対象児が触れることができる高さに設置されている。

**保育方針** 対象児の自由をできるだけ認め無理強いはしない。例えば、午睡ができない子どもの場合には遊戯室で遊ぶことを認めるなど。

保育者とのスキンシップを図る。例えば、泣く子どもをおんぶするなど。気分の転換を図る。例えば、保育園の外に散歩に出掛ける。乳児の部屋に遊びに行くなど。

## （2）子どもの様子

緊急的一時保育の場合は、泣きの状態がかなり続き、保育者の背中で泣き疲れて眠る状態が多い。しかし、通常保育を受けている子どもたちの姿を見ると興味を示す様子もみられ、乳児であっても他児の様子を目にすることは、新しい場への適応を図る効果的方法であることが示唆された。また、観察対象の保育園では、一時保育の利用児のきょうだいが、通常保育を受けているケースもあり、そのきょうだいだけでなく彼等の友達も一緒に一時保育の部屋に出入りすることが許されている。きょうだいと遊ぶことで新しい場での不安を軽減し、精神的安定を得ている子どもも見られた。このことは、先に全国私立保育園連盟の指摘があったように、一時保育を利用する子どもにとって保育の場と日常生活の場とが生活的関連性を持つことが精神的安定を得るための必須条件であることを示す事例といえよう。そのためには、子どもの愛着対象物など、物と関わることで子どもが安定を得ることができるものを持ち込むこと、あるいは保育の場への日常的に関わりを持つことなどが考慮される必要がある。

このような配慮は緊急的一時保育児だけでなく、非定型的一時保育児にも必要な配慮ではある。しかし、非定型的一時保育の場合は、週に3日以内というように不連続ではあるが継続的に保育を受けるため子どもが保育の場に慣れてゆく様子が明確に認められる。この子どもたちの場合は単に保育の場に慣れるだけでなく、子ども自身がそれぞれ安定する場や方策を見つけだしてゆくことが認められた。例えば、ある子どもにとっては迎えにくる母親の車を確認できる特定の窓辺にとどまることが安定を得る方策となっていた。また、ある子どもにとっては、大きな箱積み木で囲われた空間にとどまることが安定を得る方策であった。さらに、ある子どもにとっては着替えの入っている袋に触れていることであったり、午睡用の布団であったりとその対象物や空間は異なるが、愛着対象物と関わりを持つことが保育の場への適応の必要条件となっていた。

**保護者の思い** 緊急一時保育児の場合は、1日で保育の場になれることはかなり難しいため、保護者にとってつらい体験になりやすい。しかし、非定型的一時保育を利用している保護者の場合には、保育経験を重なることで子どもが保育の場へ適応してゆく様子を保護者自身が実感することができるため高い評価を与えるものが多い。

一時保育の利用児の年齢は、生後7か月から3歳台に分布し、年齢別利用率は、0歳児24.6%、1歳児29.0%、2歳児34.8%、3歳児11.6%と、3歳未満に集中している。そこで、新しい場への適応に関する負担が子どもの年齢によって、どのように異なるか実験的に検討するため次の実験的研究を行った。

## 2. 実験的研究

### (1) 研究対象

1歳0か月時、2歳0か月時、3歳0か月時の3回に渡ってデータを入手することができた32組の母子が研究対象である。

研究の協力は、対象地域の市役所が12か月未満の子どもをもつ保護者を対象に毎月1回開催している「ベビー健康プラザ」に参加した母親に研究の協力を求めた。その際、3歳までの継続研究に参加することについても了解を取った。しかし、親の転勤、家族の病気、次子の誕生などにより研究を継続できなくなったものが発生し、1歳時、2歳時、3歳時のデータが完全にそろった対象数は研究開始時の約半数に減少した。

研究への参加は、基本的に対象児の誕生日のプラス・マイナス2週間の間で、対象母子の都合のよい日時に行った。

### (2) 研究方法

本研究では、短期間の母子分離場面における子どもの情緒的变化を実験的にとら

表Ⅲ－２ 実験手続きの教示の概要

第1場面	別室で実験者が、母親に第2場面から第8場面までの実験手続きを説明する。 実験者が、母親と子どもを実験室に案内する。
第2場面	約3分間 お子さんを指定の場所に案内し、お母さんは所定の場所に座り、本を読んでいてください。 お子さんが一人で遊んでおられる場合は、お母さんは話し掛けしないでください。2分たってもお子さんが遊ばれない場合は、おもちゃの方に興味が行くように働き掛けてください。
第3場面	約3分間 1分目にお子さんが初めて会う人が入室し、黙って母親の近くに座ります。 2分目、初めて会う人が、お母さんに親しそうに話し掛けます。 3分目、初めて会う人が、お子さんに話し掛けます。 3分後、お母さんはお子さんに気付かれないように、退出してください。
第4場面	約3分間 初めて会う人は、お子さんから働き掛けがある場合はそれを受け入れますが、初めて会う人から積極的にお子さんに話し掛けたり、働き掛けたりはしません。
第5場面	約3分間 お母さんは、お子さんから姿が見えないところで、大きな声でお子さんの名前を3回、呼んでください。部屋の入り口で少し立ち止まってください。もし、お子さんが泣かれている場合は、慰めてあげ、落ち着かれたら、遊ぶように促してください。もし、一人で遊んでおられる場合は、お母さんはご自分の席に座わり、本を読んでいて下さい。お子さんからの働きかけは、受けてください。 合図があったら、お子さんに「バイバイ」といってから退出してください。
第6場面	約3分間 お子さんが、一人になる場面です。
第7場面	約3分間 初めて会う人は、お子さんから姿が見えないところで、大きな声でお子さんの名前を3回呼び、部屋の入り口で少し立ち止まります。お子さんが泣かれている場合は、慰めてあげ、落ち着かれたら、遊ぶように促します。一人で遊んでおられる場合は、初めて会う人は自分の席に座わり、お子さんの様子をみています。お子さんから働きかけは受けます。
第8場面	約3分間 お母さんは、お子さんから姿が見えないところで、大きな声でお子さんの名を3回、呼んでください。部屋の入り口で少し立ち止まってください。お子さんが泣かれている場合は、慰めてあげ、落ち着かれたら、遊ぶように促してください。一人で遊んでおられる場合は、お母さんはご自分の席に座わり、本を読んでいて下さい。お子さんからの働きかけは受けてください。 初めて会う人は、静かに退出します。

えるために、Ainsworth et al. らによるStrange-Situation Procedure を施行した<sup>15)</sup>。この手法は、表Ⅲ-2に示すように8つのエピソードで構成されており、子どもが母子分離によって体験するストレスは第6場面でも最大になるように構成されている。

実験室には対象児が日頃触れたことのない玩具として、ブロック（ジャクエツ製）、乗客を乗り降りさせることができる大型バス（フィッシャー製）、木製のままごと道具（河合製）を配置した。これらの玩具と母親及びストレンジャーの位置が、実験室の中心（子どもの最初の位置）から等位置になるように配置した。

Strange-Situation Procedure における行動は、実験室の4隅に設置した4台のカメラによって、すべてビデオに収録した。1台のカメラは実験室全体を被写体とし、他の2台は子どもの表情をとらえ、他の1台は母親の様子を記録した。4台のカメラの映像をマルチビューアー（朋栄MV-40D MULTI VIEWER）に取り込み、1秒単位でタイムレコードを挿入した。

子どもが各場面で表出する愛着行動、探索行動、親和行動、回避行動の表出されるまでの時間を行動潜時として計測した。

愛着行動は、接近、接触、泣き、後追い等である。

親和行動は、注視、発声、笑い、おもちゃの授受、おもちゃの提示、応答である。

探索行動は、おもちゃへの関心、接近、接触・操作等である。

回避行動は、相手および相手の働きかけを回避する行動である。

これらの行動によって子どもの情緒的状态をチェックすることが可能とされている。つまり、愛着行動は子どもが不安を感じる時に活性化し、探索行動は逆に子どもが安心を得ている時に活性化する特性を有している。

実験のオリエンテーション場面である第1場面は、分析対象から除いた。第2場面から第8場面について、それぞれの行動の開始時間及び終了時間を計測し、行動の継続時間を算出した。また、愛着行動、親和行動、回避行動が誰に向けられた行動であるかについても評定した。

行動のチェックは、ビデオテープを反復視聴しながら行った。

### （3）結 果

母子分離に伴う子どもの情緒的混乱が、子どもの加齢によりどのように変容するかを明らかにするために、1歳時、2歳時、3歳時のデータについて母子同室場面、母子分離場面である他者同室場面、母子分離後の母子再会場面について比較検討した結果を図Ⅲ-8～19に示した。

なお、Strange-Situation Procedure は、各場面の所要時間は約3分となっているため、基本的時間で各場面が進行した場合には、各行動が表出されるまでに要する行動潜時は、最小0秒から最大180秒の間に分布することになる。

母親と対象児が初めて実験室に同室する場面であり、他の場面に比較して不安が少ない場面でもある第2場面と対象児が1人で実験室に残される体験を経た後にこの実験で初めて出会った若い女性と同室する第7場面及び2度の母子分離を体験した後に母親と再会し同室する第8場面における対象児の行動を分析した。

なお、文中の「母子同室場面」は第2場面を、「他者同室場面」は第7場面を、「母子再会場面」は第8場面を意味している。

#### 愛着行動について

精神的な安定を得るために有効である接触行動についてみると図Ⅲ-8に示すように、この行動はいずれの年齢でも母子同室場面では場面の後半150秒前後に表出している。しかし、分離体験をした後の母子再会場面における接触行動は、1歳時は約48秒、2歳時は約84秒、3歳時は約80秒と、場面の前半に表出している。特に、1歳時と2歳時・3歳時の間に有意差が認められ、1歳時の方がより早期に表出している。この行動潜時が子どもの年齢の違いと関連することは、図Ⅲ-9の接触継続時間からも明確に認められる。母子同室場面では接触継続時間は1歳時約7秒、2歳時約3秒、3歳時約9秒と、短時間であった。しかし、母子分離を経験した後の母子再会場面の接触継続時間は、1歳時約67秒、2歳時約30秒、3歳時約12秒と、いずれの年齢でも有意に延長された。これらの接触継続時間は、1歳時>2歳時>3歳時と対象児の年齢が上昇するに連れて有意に減少することを示している。母子再会場面における接触継続時間は2歳時より1歳時の方が有意に長くなっている。この結果は、同じ条件の母子分離であっても子どもの年齢により情緒的混乱に明確な差異が存在することを示している。

また、母親と分離され、初対面の他者と同室する他者同室場面においても、他者への接触行動が場面の後半に認められた。他者への接触行動の潜時は、1歳時約154秒、2歳時約174秒、3歳時約147秒と、1歳時・3歳時に比較して2歳時では有意に長い時間を要していた。そして、その継続時間も、1歳時約13秒、2歳時約0.1秒、3歳時約1秒と短く、接触継続の意図が不明確なものとなっていた。短時間ではあるが1歳時と2歳時・3歳時の継続時間には有意差があり、1歳時の方が他者と有意に長い接触を保持していた。この結果は、情緒的安定を得るために有効である接触行動も初対面の他者の間では必ずしも有効な行為とはいえないことを示している。

次に泣きについてみる(図Ⅲ-10)。

泣き行動は、不安の表れであると同時に愛着対象を対象児のところに呼び戻す意図を持ってなされる行動である。母子同室場面では、1歳時は約150秒、2歳時は約175秒、3歳時も約175秒と、いずれも場面の後半に表出していた。泣きの行動潜時は、1歳時の方が2歳時・3歳時よりも有意に早期に表出していた。しかし、母子分離後の母子再会場面では、1歳時は約37秒、2歳時は約93秒、3歳時は約131秒と、行動潜時が有意な短縮を示した。また、行動潜時は1歳時で最も短く、ついで2歳時、最も長い

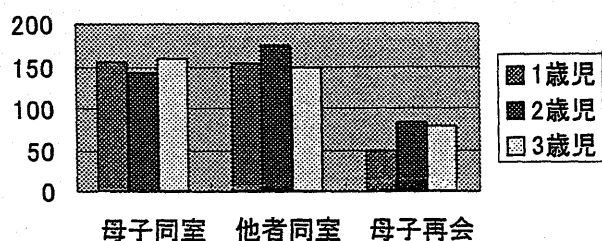


図 III-8 人に接触するまでの潜時

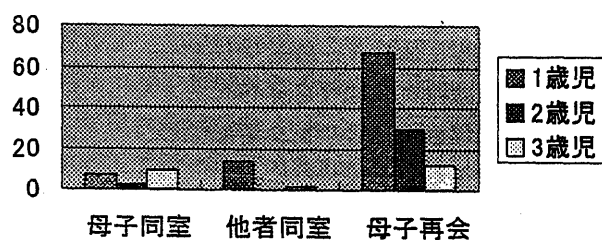


図 III-9 接触継続時間

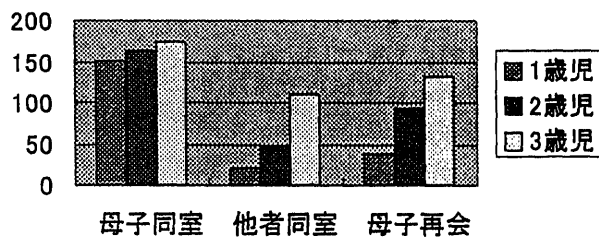


図 III-10 泣き出すまでの潜時

が3歳時であり、有意な年齢差が認められた。母子分離場面である他者同室場面では、1歳時は約20秒、2歳時は約46秒、3歳時は約110秒と、1歳時・2歳時に比較して3歳時で有意に遅く表出していた。他者同室場面と母子再会場面の泣きの行動潜時を比較すると、いずれの年齢でも母子同室場面での泣きの表出が遅れる傾向があり、特に、2歳時により顕著に認められた。

泣きの継続時間についてみると、図Ⅲ-11に示したように母子同室場面では、1歳時は約10秒、2歳時は約9秒、3歳時は約4秒であり、1歳時の方が3歳時より有意に長く泣き続けていた。一方、母子再会場面での泣きの継続時間は、1歳時は約37秒、2歳時は約33秒、3歳時は約15秒と、母子同室場面に比較して有意に長く泣きが継続されており、特に、2歳時・3歳時に比較して1歳時の方が有意に長く泣いていた。また、母子再会場面と他者同室場面を比較すると後者での泣きの継続時間は、1歳時は約50秒、2歳時は約49秒、3歳時は約32秒であり、いずれの年齢でも他者同室場面の方で長い泣きが認められ、母子分離による不安を軽減するためには母親の方がより効率的であることを示している。しかし、他者同室場面の泣きの継続は1歳時・2歳時に比較して3歳時の方が有意に短縮されており、対象児の年齢により他者同室によって母子分離による不安を軽減する傾向があることを示している。

#### 親和行動について

笑い掛け行動の潜時をみると(図Ⅲ-12)、母子同室場面では1歳時は約172秒、2歳時は約152秒、3歳時は約139秒であり、これらの行動潜時には1歳時>2歳時>3歳時という有意な関連があり、対象児の年齢の上昇に伴い有意な減少を示している。子どもにとって馴染みのない場所での緊張感は、年齢の低い子どもの方がより強く受けることを示している。分離後の母子再会場面ではこの差はより顕著になり、1歳時は約172秒、2歳時は約129秒、3歳時は約116秒であり、1歳時に比較して2歳時・3歳時で有意な減少が認められた。他者同室場面の行動潜時は、1歳時は約175秒、2歳時は約166秒、3歳時は約140秒であり、この結果を母子再会場面と比較すると2歳時及び3歳時では明らかに母子再会場面の方で笑いは早期に表出されている。笑いというポジティブな情緒が早く表出するということは、先に愛着行動で明らかになったように、3歳時では母子分離による情緒的混乱が1歳時に比較してより少ないことを示している。笑いよりさらに積極的な親和行動である発声行動についてみたのが図Ⅲ-13である。母子同室場面では1歳時は約75秒、2歳時は約78秒、3歳時は約65秒と、いずれの年齢でも比較的早期に表出していた。母子再会場面では1歳時は約105秒、2歳時は約77秒、3歳時は約49秒であり、2歳時・3歳時に比較して1歳時で有意に長い時間を要していた。また、他者同室場面では1歳時は約145秒、2歳時は約147秒、3歳時は約111秒と、1歳時・2歳時の方が3歳時よりも有意に長い時間を要していた。母子再会場面と他者同室場面を比較するといずれの年齢においても他者同室場面の方が有意に長い時間



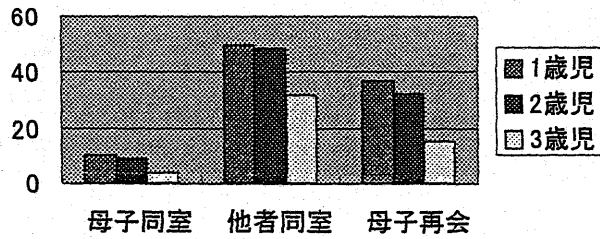


図 Ⅲ-11 泣きの継続時間

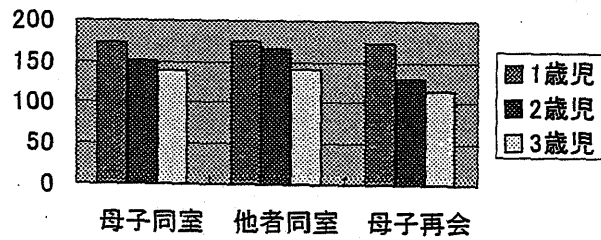


図 Ⅲ-12 笑いかけるまでの潜時

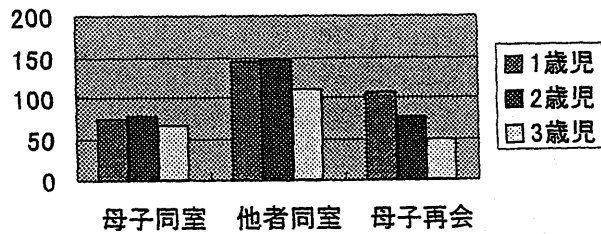


図 Ⅲ-13 人に発声するまでの潜時

を要していた。

これらの結果は、愛着行動の潜時と同様に3歳時の方が母子分離に伴う情緒的混乱が1歳時・2歳時に比較して小さく、また、立ち直りも早いことを意味している。

#### 回避行動について

母子同室場面及び母子再会場面において母親に対する回避行動はほとんど認められなかった(図Ⅲ-14)。しかし、他者同室場面では1歳時は約130秒、2歳時は約119秒、3歳時は約157秒に、初対面の他者を回避する行動が認められ、2歳時は3歳時よりも有意に早く回避行動を表出した。この結果からも3歳時は、他者を受け入れることができるようになっていることを示している。

#### 探索行動について

玩具の授受に関する行動潜時を示したのが、図Ⅲ-15及び16である。玩具を差し出す行動をみると、母子同室場面では1歳時は約163秒、2歳時は約140秒、3歳時は約157秒であり、1歳時の方が2歳時よりも有意に潜時が長くなっていた。また、母子再会場面では1歳時は約166秒、2歳時は約128秒、3歳時は約149秒であり、この場面でも1歳時の方が2歳時よりも有意に潜時が長くなっていた。しかし、いずれの年齢においても両場面間には有意差は認められなかった。他者同室場面では1歳時は約175秒、2歳時は約163秒、3歳時は約154秒であり、1歳時の方が3歳時よりも有意に潜時が長くなっていた。

一方、玩具を受け取る行動の潜時は、母子同室場面では1歳時は約2秒、2歳時は約13秒、3歳時は約8秒であり、3歳時の方が1歳時よりも有意に長くなっていた。また、母子再会場面では1歳時は約43秒、2歳時は約42秒、3歳時は約18秒であり、1歳時の方が2歳時・3歳時よりも有意に潜時が長くなっていた。いずれの年齢においても母子再会場面の方が行動の表出が遅くなることが認められた。他者同室場面では1歳時は約82秒、2歳時は約69秒、3歳時は約58秒であり、1歳時の方が3歳時よりも有意に潜時が長くなっていた。

この結果は、場面の違いや対象児の年齢の違いに関係なく、玩具の授受に関する行動潜時は、受け取り行動の方が早くに表出することが明らかになった。この差異には、受容的行動と意図的行動の違いが大きく関与することが示唆される。しかし、受容行動である受け取る行動もその与え手と対象児との関係性により大きな影響を受けることが、子どもにとって初めて出会った他者から玩具を受け取る行動の潜時は母親から受け取る潜時に比較して有意に長いことから示唆される。と同時に、年齢的には明らかに加齢に伴い有意な減少を示し、他者の受容がより容易になることを示している。

玩具への関心行動の潜時についてみたのが図Ⅲ-17である。母子同室場面では1歳時は約45秒、2歳時は約19秒、3歳時は約8秒であり、1歳時の方が2歳時・3歳時より

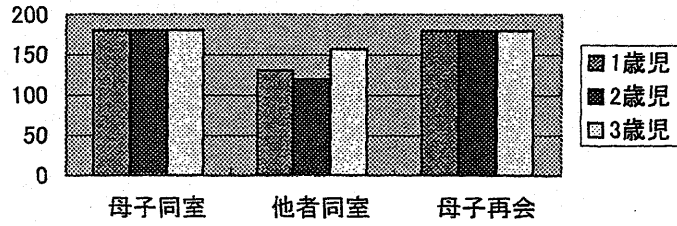


図 III-14 回避行動の潜時

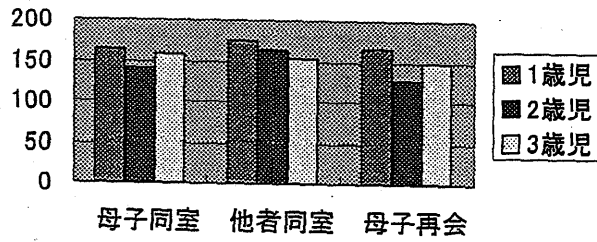


図 III-15 玩具を差し出すまでの潜時

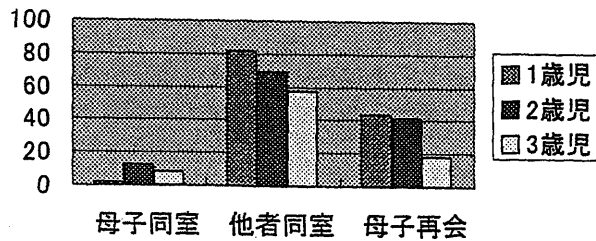


図 III-16 玩具を受け取るまでの潜時

も有意に長い時間を要していた。また、母子再会場面では1歳時は約76秒、2歳時は約28秒、3歳時は約35秒であり、やはり1歳時の方が2歳時・3歳時よりも潜時が有意に長くなっていた。両場面を比較すると2歳時では有意差が認められなかったが、1歳時および3歳時ではいずれも母子再会場面の方が行動表出まで有意に多くの時間を必要としていた。他者同室場面では1歳時は約110秒、2歳時は約101秒、3歳時は約61秒であり、1歳時・2歳時の方が3歳時より潜時が有意に長くなっていた。母子再会場面と比較するといずれの年齢においても母子再会場面の方で有意に早く行動が表出されており、他者同室場面ではこの行動はいずれの年齢でも抑制されることが明らかになった。

この特性は、玩具への接近および玩具への接触・操作においても認められるものであった。図Ⅲ-18に示すように玩具に接近する行動の潜時は、母子同室場面では1歳時は約73秒、2歳時は約29秒、3歳時は約24秒であり、1歳時の方が2歳時・3歳時よりも有意に長い時間を要していた。また、母子再会場面では1歳時は約91秒、2歳時は約35秒、3歳時は約41秒であり、やはり1歳時の方が2歳時・3歳時よりも潜時が有意に長くなっていた。両場面を比較すると1歳時及び2歳時では有意差が認められなかったが、3歳時では母子再会場面の方が行動表出までに有意に多くの時間を必要としていた。他者同室場面では1歳時は約113秒、2歳時は約111秒、3歳時は約74秒であり、1歳時の方が2歳時・3歳時より潜時が有意に長く要していた。母子再会場面と比較すると1歳時では有意差が認められなかったが、2歳時及び3歳時ではいずれも母子再会場面の方でより早期に表出されていた。

玩具に接触・操作するまでの行動潜時をみたのが図Ⅲ-19である。母子同室場面では1歳時は約86秒、2歳時は約41秒、3歳時は約41秒であり、1歳時の方が2歳時・3歳時よりも有意に長い時間を要していた。また、母子再会場面では1歳時は約95秒、2歳時は約38秒、3歳時は約52秒であり、やはり1歳時の方が2歳時・3歳時よりも潜時が有意に長くなっていた。両場面を比較するといずれの年齢においても有意差は認められなかった。他者同室場面では1歳時は約113秒、2歳時は約112秒、3歳時は約77秒であり、1歳時及び2歳時の方が3歳時より潜時が有意に長く要していた。母子再会場面と比較すると1歳時では有意差が認められなかったが、2歳時及び3歳時ではいずれも母子再会場面の方でより早期に表出されていた。母子分離場面である他者と同室する場面ではいずれの年齢でも行動潜時は長くなっており、子どもの行動が母子分離による影響を強く受けていることを示している。なお、玩具に接近する行動潜時よりも操作の方が時間を要しているのは、子どもと玩具の位置が離れていることに起因しているだけでなく、接近行動が接触・操作の前行動であることによる。

#### まとめ

非定型的一時保育の場合は、保育体験を重ねることで子どもが保育園の生活の場で自分自身を十分にだすことができるように成長することが確認された。しかし、緊急的一時保

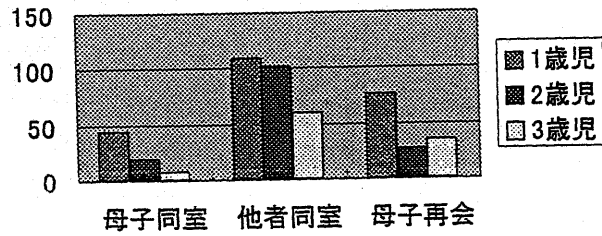


図 III - 1 7 玩具に関心を示すまでの潜時

玩具に接近するまでの潜時

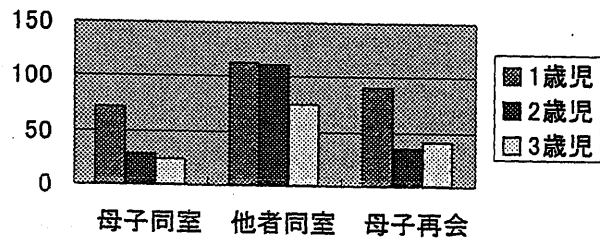


図 III - 1 8 玩具に接近するまでの潜時

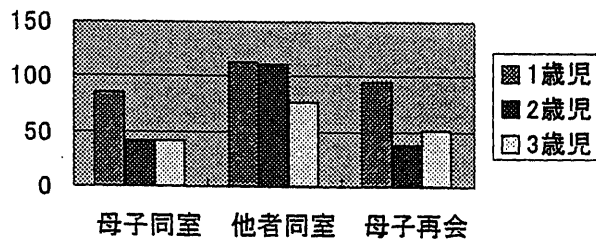


図 III - 1 9 玩具に接触するまでの潜時

育の場合は、1日のみの保育経験に終わることが多く、保育の場への適用はほとんど無理と言える状態であった。通常保育を受ける場合でも、子どもにとって突然1日8時間の保育が始まるのではない。数日間に渡る「ならし保育」を体験した後で、初めて通常保育が開始されるというように、子ども側と親側が保育の場への適応期間が用意されている。一時保育の場合はこの「ならし保育」の期間なしに保育が開始されるものであり、制度そのものが子どもの側の配慮を欠いた形で設けられている。本研究からどのように利用する子どもの負担を軽減するかについて次の示唆を得た。

最も重要なことは、子どもにとって新しい場で生活することに伴う情緒的負担は子どもの年齢によって明らかに違いがあることから年齢を配慮した保育を考える必要があるということである。特に、3歳児は認知的発達に関与もあり、保育者の関わり方によって親との分離に伴う不安が軽減され、子どもが自分の世界を拡大する為に有効な探索行動を展開できることが実験的にも確認された。その場合に、子どもが愛着対象物を保育の場に持ち込むことは、子どもが自分の生活を拡大する為の要件であることが一時保育の事例的観察から明らかになった。特に、この点に関しては3歳以下の子どもの場合にも有効であることが事例的観察から明らかになった。ほとんどの保育園では一時保育の場に「家庭を持ち込むこと」を禁じているが、「ならし保育」無しに始めざるを得ない一時保育の場合はむしろ、積極的に保育の場に「家庭を持ち込むこと」を行い、子どもの生活として「家庭」と「保育園」の連続性を図る必要性が示唆された。

一時保育の専用の空間が確保されていることは、子どもが自分の空間を確保することを助けるものとなっていることが事例的観察から示唆された。特に、自己移動が可能な年齢の子どもにとってその効果が顕著に認められた。また、子どもの年齢にかかわらず、他児の存在が親との分離に伴う子どもの情緒的負担を軽減する効果を持つことも確認された。緊急的一時保育の件数は、非定型的保育の件数よりも少ないが、保育者を配置する場合は、緊急的一時保育に一对一の対応が可能な保育者数を確保することの必要性が実験的研究から示唆された。その日その日の利用児数に対応して保育者を確保できるような体制を整備する必要がある。